

森鷗外は誰の為に舞姫を執筆したのか

初めに、テーマ設定の動機を説明する。

この話の最後では主人公の豊太郎は恋人であるエリスを捨てたのにも関わらず冒頭で「ああ、いかにしかこの恨みを銷せん。」とエリスと別れたことを酷く後悔している。また、友人相沢に対して「ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし。されど我が脳裏に一点の彼を恨む心今日までも残れりけり。」と表現し感謝の意を表す反面彼を憎んでいるとも書いてある。森鷗外はこのどっちつかずな主人公・豊太郎を通して一体何を、誰に伝えたかったのか。鷗外自身のことや時代背景などを考慮した上でより深く追求したい。私は舞姫を読んだ直後こんなことを考えていた。これが今回の動機である。

私はこのテーマに対して「鷗外は自分の為に舞姫を執筆した」ということを、様々な情報を整理してから述べたいと思う。

まず、鷗外について舞姫執筆に至るまでの経緯を整理してみる。

本名は森林太郎。鷗外は藩の典医、つまりお抱え医師を代々務める家の長男として生まれ、武家の長男としての自覚を厳しく教え込まれた。年少の頃から神童と呼ばれる程評判が高く、現東京大学医学部に人より二年早く入学。卒業後は陸軍留学生としてドイツに渡り医学研究に励む一方で、西洋の哲学や文学から大きな影響を受けた。ドイツ留学中に恋に落ちるが、鷗外は彼女を振り切って帰国する。しかし鷗外の恋人であったエリーゼ・ヴィーゲルトは鷗外を追って日本へやって来てしまう。鷗外の親族がエリーゼを帰国させた後、鷗外は舞姫を出版した。

私は鷗外についてまとめている内に、何となく舞姫主人公の豊太郎のことを思い出した。というのも鷗外と豊太郎の境遇が酷く似ているからである。

豊太郎は父を失いながらも幼い頃から厳格な家庭教育を受け、人々から神童と呼ばれる程であった。また東京の予備校（東京大学予備校）にも通い、後に法学部に入ったということから現東京大学法学部に在籍していたことがわかる。19歳で卒業後官省に勤め、3年後に洋行、つまりドイツ留学をしている。留学先ドイツで政治学を修めようとするも政治家や法律家になるのには自分は相応しくないと諦め、歴史や文学に心惹かれるようになる。そして鷗外と同じくドイツで恋にエリスと恋に落ちたのだった。

太田豊太郎と森林太郎。エリス・ワイゲルトとエリーゼ・ヴィーゲルト。ここまで似ていて全く関係がないと言い切れるだろうか。

このことにより鷗外は自分と恋人であったエリーゼを舞姫の登場人物のモデルにしているということがわかる。

それではどうして鷗外は自分や自分の知人をモデルにした小説を書いたのだろうか。

ここで鷗外帰国後の行動を細かく見ていくと気になる所が出てくる。帰国後陸軍軍医学舎教官となりその翌年にエリーゼが日本へやって来るのだが、同年、海軍中将・男爵赤松則

良の長女登志子という女性と結婚していたのだった。そして更に翌年、舞姫出版後に登志子と離婚している。何故鴎外はこのような不可解な行動を取ったのか。

私は鴎外は実際はエリーゼのことを忘れられなかったのではないかと考えた。登志子の父親、赤松則良の階級は海軍中将であり鴎外の階級は医学舎の教官であったのだから、もしかすると鴎外にとって登志子との婚約は断れないものであったのではないか。

さて登志子との縁談が西から持込まれたとき、二十七歳の林太郎は「両親の気持次第に」と譲った。帰朝後の彼は、役所づとめのかたわら、主に医学評論、そして文学評論の分野で猛烈に仕事を始めたばかりである。仕事に書き物に忙しく、結婚のことなど深く考える余裕はなかった。

（中略）

…おそらく、赤松家側でも十七歳の登志子の意志などはほとんど顧みられなかったのではあるまいか。

（「鴎外の坂著」森まゆみ より引用）

そして何より「我と我が心さへ変はりやすきをも悟り得たり。昨日の是は今日の非なる我が瞬間の感触を…」と豊太郎が回想する前、つまり彼にとっての“今”、そう感じていることが示しているのではないか。登志子と婚約したその時は何とも思っていなかったが時間が経ちエリーゼのことが忘れられなかった。しかし一年間という時間が経ち過ぎエリーゼがどこにいるのか、結婚しているのかもわからず、また鴎外自身も医学舎教官という地位を捨てることもできなかった。だから舞姫を書くことでエリーゼとの出会いを文字に残しておきたかったのではないだろうか。エリーゼとはもう元の仲に戻ることができないことを示すことで豊太郎とエリスを別れさせる、といった結末にしたのも納得できる。

結論として、舞姫は誰よりも鴎外自身の為に書かれたものであるという可能性が高いとされる。勿論鴎外自身の意図は鴎外にしかわからないので舞姫を書いた本当の理由は他にあるのかもしれないが、鴎外自身のドイツでの体験、エリーゼとの出会いや別れが少なからず影響しているのではないかと思う。

相沢や天方伯などのモデルもいたのかどうか、もっと調べることができたらよかったと思う。

参考文献 森鴎外Ⅱ（日本文学研究資料叢書）

鴎外の坂（著 森まゆみ）